

トウクトウクで走る街の中心部は、舗装のいきとどいていないがたがた道のせいで、体に衝撃が走る。周囲は、土にしみた雨の匂いで充満している。生暖かい風を頬に受け、隣をすれすれに通り返りすぎていくバイクタクシーから身をかわす。

「スリーダラー。」

どう考えても、この近距離では1ドル以下が相場だろうという距離に、交渉どおり3ドルを支払い、トウクトウクをおりた。

空を仰ぐと、どんよりした雲の向こうに強い太陽の光が隠れている。足元には雨季の雨があふれていたけれど、昨日は埃っぽかった街全体の空気が雨で掃除されているようだった。

屋台でヤキソバを焼いている笑顔のおばさんから、袋に入ったスープとヤキソバを受け取り、二〇〇リエル支払うと、ぶらぶらと街を歩いた。

私という存在を消し去ってしまった認知症の祖母を見舞った帰り、たまたま目にしたタプルームの遺跡のパンフレットを見て衝撃を受けた私は、その足で旅行会社に行き、航空券とホテルを手配した。そのため、カンボジアという国について、まったくといっていいほど前知識がなかった。だから、こうしてシエムリアップの街に昨日到着してから、どうしてよいかわからずさまよっていた。雨水のあふれた道、バイクやトウクトウクの行き交う喧騒たる街、木やトタンを組み合わせてつくった建物、目の前にあるのはお世辞にもきれいとは言えない街だ。しかし、人々の目は輝き、街全体から力強さが伝わってくる。

「アーユージャパニーズ？ トウクトウク、ファイブダラー。」

「ニホンノトモダチ、フォーダラー。」

歩いていると、トウクトウクの運転手がさかんに声をかけてくる。日本のようにメータータクシーがないため、乗る前に料金の交渉が必要だ。ホテルまでトウクトウクで戻る必要があるが、日本人だとわかるととても高い値段を設定する。それらのトウクトウクの1団をノーサンキューと言ってやりすごし、あらたなトウクトウクを探す。

周囲を見回すと、一台のトウクトウクが道の端に遠慮深そうに止まっていた。運転手の「彼」の視線は、雨上りのさわやかな空に向いていて、大きく深呼吸をしている。

「〇〇ホテルまでお願いしたいのですが。」

突然私に声をかけられてびっくりした様子だったけれど、すぐにこくりとうなずいた。

「一ドルで行ってもらえますか？」

彼は、だまつてうなずいた。

これが「彼」との出会いだった。

次の日、たずねておいた携帯に電話すると、彼はすぐにやってきた。そして、ホテルの敷地の、一番目立たない場所でひっそりと待っていた。薄緑のシャツと青いズボンに着古しているけれど、きちんと洗濯されている感じがした。

「今日は、タプルームの遺跡に行きたいのだけど、一ドルでいいかしら。」

「オーケー。」

相場よりもかなり安い値段を口にして、あっさりオーケーという言葉がかえってきたことに、私はあわててしまった。そんな私の様子をもともせず、彼は黙々とトウクトウクを走らせた。途中、何度か彼に話しかけてみたが、街の喧騒のせいで、私の言葉は彼に届かなかった。あるいは、彼は簡単な英語しか理解できないのかも知れなかった。でも、彼はいつも穏やかな顔をしていた。

ガジュマルに覆われたタプルームの遺跡。修復せずに放置された巨大な石の数々。苔むしたデバター。認知症の祖母の頭から、私の存在を消し去ってしまった時間の流れを止めてしまいたいと常々思っていた。ここでは、おびたしい時間の流れが静寂の中で固まっていた。それは、遺跡にとっては破壊であったが、いまではガジュマルと共鳴していた。祖母の認知症も、私という存在を解せなくなった祖母も、それがいまの祖母なのだ。タプルームの遺跡を前にして、私は祖母の認知症を受け入れられるような気がした。

次の日も、その次の日も、彼は私の指定した時間にきちんと待っていた。相変わらず言葉少なだったけれど、少しずつ笑顔を広げて待ってくれるようになった。そして、日の最後には、どんなに私が言っても一ドルしか受け取らなかった。

そんな日が続き、ついに明日帰国という日になった。

「今日は、あなたのおすすめの場所に連れていってくれますかしら。」

「オーケー。」

彼は、それだけ言うと、トウクトウクを走らせた。

トウクトウクは、アンコールワットの付近をすぎて、まだ走り続けていた。どこへ行く

のだろう、どこまで行くのだろう。トゥクトゥクを走らせる彼のうしろ姿を見ながら、少し不安になってきた。思えば、私は彼のことなんて全く知らないのだ。なんとなく勘で、感じの良さそうな人、と思っているだけだ。

やがて、トゥクトゥクは止まった。そこには、「The Land Mines Museum 地雷博物館」とあった。

カンボジアには、今なお地雷がたくさん埋められているという。それをあやまって踏んでしまい、命を落とした人、足が不自由になってしまった人たちがたくさんいるという。写真や、日本語による解説もあった。そのリアルさに、思わず目を背けてしまいたくなる場面もたくさんあった。

彼は、所在なげにトゥクトゥクにもたれかかって私を待っていた。その眼は、潤んでいるように見えた。

「私の身近な人が、地雷を踏んで亡くなったんだ。」

彼はそれだけ言うと、トゥクトゥクを走らせた。

身近な人って、誰なんだろう。もし、自分の大切に思っている人が地雷を踏んでしまったことでこの世から消えてしまったら……。そう考えると、彼の心の痛みがじんじん伝わってきて、彼の姿が涙でにじんだ。それと同時に、カンボジアという国の発展を妨げているものの根の深さや闇の部分がひしひしと感じられた。

辺りはすっかり暗くなっていた。カンボジア最後の夜になって、私ははじめてこの国を知る入口にようやく立てたのだ。その国の人と知り合ってはじめて、その国の扉を心から開けることができるのだ、としみじみ感じていた。

トゥクトゥクはシエリムアップの空港に向かっていた。彼のトゥクトゥクに乗るのも、これが最後だ。

「リエルがたくさん残っているのです、お願いだから使ってください。」

私は、たくさんためたりエルを封筒に入れて、無理矢理彼に渡した。彼はまたあの遠慮深そうな笑顔をみせて、それを受けとった。

「ありがとう。あなたのおかげでカンボジアを好きになれそうだし、いろいろなことをこれから知りたいと思ったわ。」

握手のために手を差し出すと、彼はそれには応じず、そのかわりポケットに手をつっこんだ。

「帰りの飛行機で読んでください。」

ポケットから出したしわだらけの封筒を、照れくさそうに私に渡した。

飛行機が飛び立つと、私はそつと手紙の封を開いた。思いがけないことに、とてもきれいな英語で書かれていた。

「この数日間、ありがとう。カンボジアという国があなたの目にどのようなうつただろうか。この国をなんとかすばらしい国にしたい、その気持ちを胸に、一生懸命勉強して奨学金をもらい、ベトナムの大学を卒業した。そして仕事に就いたのだが、舌の病気になってしまった。そのため、うまく話をするのができなくなり、仕事を失った。だから、あなたもたくさん話ができなくて残念だ。この病気はカンボジアでは治療できないので、トウクトウクの運転手をしながら、お金をためて治療したいと考えている。」

カンボジアは、あなたの国日本のように発展もしていないし、きれいな国でもない。しかし、私のように、心の底から国をよくしたいと考えている人がたくさんいる。どうか、この旅であなたが感じたカンボジアという国のことを、日本の人々に伝えてほしい。

これからも、あなたがすてきな旅を続けられるよう、祈っている。そして、またいつか、カンボジアを訪れてほしい。」

4

飛行機の外雲が、涙でかすんだ。

帰ったら、まず祖母にカンボジアの旅のことを話そう。

彼の手紙を手にしたままずつと、私は時が経つのを忘れていた。